

私は振返って音のする方を眺めた。千駄木の崖上から見る彼の広漠たる市中の眺望は、今しも蒼然たる暮靄に包まれ一面に煙り渡った底から、数知れぬ燈火を輝し、雲の如き上野谷中の森の上には淡い黄昏の微光をば夢のように残していた。私はシャワンの描いた聖女ジェネヴィエーブが静に巴里の夜景を見下している、かのパンテオンの壁画の神秘なる灰色の色彩を思出さねばならなかった。

鐘の音は長い余韻の後を追掛け追掛け撞き出されるのである。その度毎に其の響の湧出る森の影は暗くなり低い市中の燈火は次第に光を増して来ると車馬の声は嵐のように却て高く、聴て鐘の音の最後の余韻を消してしまった。私は茫然として再びがらんとして何物も置いてない觀潮樓の内部を見廻した。そして、この何物もない楼上から、この市中の燈火を見下し、この鐘声とこの車馬の響をかわるがわるに聴澄ましながら、わが鷗外先生は静に書を読み又筆を執られるのかと思うと、実にこの時ほど私は先生の風貌をば、シャワンが壁画中の人物同様神秘に感じた事はなかった。

ところが、「ヤア大変お待たせした。失敬失敬。」と云って、先生は書生のように二階の梯子段を上って来られたのである。金巾の白い襯衣一枚、その下には赤い筋のはいた軍服のズボンを穿いて居られたので、何の事はない、鷗外先生は日曜貸間の二階か何かでごろごろしている兵隊さんのように見えた。

「暑い時はこれに限る。一番涼しい。」と云いながら先生は女中の持運ぶ銀の皿を私の方に押出して葉巻をすすめられた。先生は陸軍省の医務局長室で私に對談せられる時にもきまつて葉巻を勧められる。若し先生の生涯に些かたりとも贅沢らしい事があるとするならば、それはこの葉巻だけであろう。